高専におけるクラブ指導の実践と課題
－バスケットボール部の活動を通して－

春名　桂*

Practice and Challenges of Coaching the Basketball Club at Technical College
－Through the Activities of Basketball Club－

Katsura HARUNA*

ABSTRACT

In the Technical College having a study period of five years, the club activities are considered to be one of important extracurricular activities to bring up students' human nature. Since five consecutive years without turning points cause slumps and burnouts to the students, many coaches are troubled about these problems.

However, by making the best use of the indispensable consistency and continuance to coaching the basketball club, by making the senior students role models, and by communicating with the junior students politely, I have considered that I could take advantage of five years effectively.

Keywords: coaching, basketball, technical college

1.　はじめに

高等専門学校（以下、高専）は、5 年間の就業年限を有し、同じ年齢層が所属する高等学校、大学のそれとは異なっている。その在学期間の差異が、高専教育の独自性（5 年間一貫教育）を生む大きな要因であるとともに、卒業時に若く活力のあるエンジニアとして、世界へ羽ばたく源泉となっている。

高専も高校、大学と同様に、課外活動としてのクラブ活動が存在し、神戸市立工業高等専門学校（以下、本校）においても、活発な活動がなされている。

それは、本校の教育方針の一つである、人間性豊かな教育、すなわち、「心身の調和のとれた、たくましい感受性豊かな人間形成をめざして、教養教育の充実を図るとともにスポーツ・文化クラブ等の課外活動の振興につとめます[(1)]。」を具現化しているともいえる。

しかし、節目のない 5 年間という時間は、時に中だるみやバーンアウト（燃え尽き）、マンネリ化を生む危険性をはらみ、クラブを指導する上においては、多くの指導者が頭を悩ませる問題となっている。

一方では、平成 19 年に徳山工業高等専門学校（以下、徳山高専）が実施した専攻科修了生・本科卒業生・企業対象アンケートにおいて、高専に対する社会の要望の中に、「基本的生活習慣」「礼儀」「あいさつ」といった、クラブ活動を通して醸成されるキーワードから、人間性を育むクラブ活動の重要性を、再認識することができる[(2)]。

本研究は、本校バスケットボール部の活動を参考に、5 年間の継続をいかにサポートしていくかについて、考察する。

2.　バスケットボール部の概要

2.1　現在の部員数

平成 21 年 5 月現在、部員数は 66 名であり、本校にある運動部の中で、硬式野球部に次いで 2 番目の規模である。部員数の学年別・男女別内訳を表 1 に示している。

表 1　部員数の学年別・男女別内訳人数

	5 年	4 年	3 年	2 年	1 年	合計
男子	4	7	11	11	11	44
女子	4	4*	3	1*	10	22
計	8	11	14	12	21	66

（*　男子部の女子マネージャー1 名を含む）

*一般科（保健体育）　准教授

2.2　部員数の変遷

過去 5 年間における部員数を、毎年 5 月で集計した場合、図 1 に示す通り、増加から横ばい傾向で推移している。

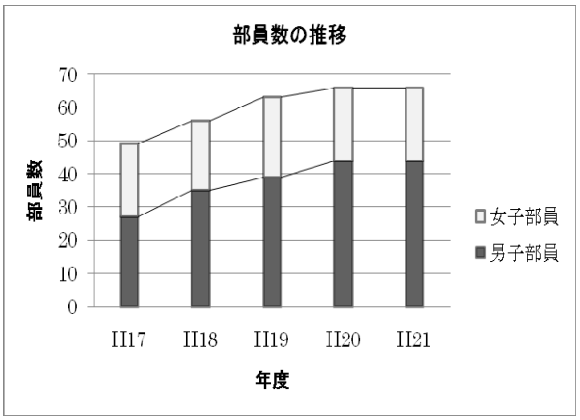

図 1　部員数の年度推移

2.3　年間の活動計画

年間の活動計画を表 2 に示している。

下記大会以外に、市内の中・高校、大学と合同練習並びに練習試合を行っている。

表 2　年間の活動計画

月	参加大会名及びクラブ行事
4 月	春の打ち上げ* 神戸市民体育大会**
5 月	兵庫県高等学校総合体育大会**
6 月	兵庫県高等学校総合体育大会**
7 月	学園都市交流戦* 近畿高専体育大会* 兵庫県高等学校選抜優勝大会神戸地区予選**
8 月	全国高専体育大会*
9 月	シーズン・アウォード* 神戸市総合体育大会西区予選会**
10 月	明石高専定期戦* 神戸市総合体育大会**
11 月	神戸市秋季大会**
12 月	兵庫県高校新人選抜優勝大会神戸地区予選** 年末強化練習試合* 体育館の大掃除*
1 月	兵庫県高校新人選抜優勝大会神戸地区予選** 神戸市立高校大会**
2 月	兵庫県高校新人選抜優勝大会**
3 月	保護者情報交換会 OBOG 会* 5 年生送別会* 近畿地区高専春季交流大会* F1 カップ*

(*　5 学年全体での参加、**　3 年生（2 年生）以下の参加)

2.4　練習日

現在は、男子部、女子部がそれぞれ独立して活動している。学期中は男女とも週休 2 日、長期休業（夏季・冬季・学年末）中は、おおよそ 3 日間練習し、1 日オフを設けるペースで練習を行っている。

学期中の練習日について、以下の表 3 に示している。

表 3　学期中における週間練習計画

	月	火	水	木	金	土日
男子	練習	Off	練習	練習	Off	練習
女子	Off	練習	練習	Off	練習	練習

2.5　チームの形態

毎年 4 月から 8 月までの間は、チーム内に最大 5 学年が存在し、同じコートで練習を行っている。そのため、年間計画に組まれている大会やテーマに向けて、適宜グルーピングを変え、練習の効率化を図っている。

まず、チーム全員に共通するファンダメンタル（基礎的な技術）や戦術を浸透させたい場合は、共通の練習を分け隔てなく、全員で行っている。

また、練習の主眼を高校大会においたときは、上級生対下級生というスクリメージ（紅白試合）を行っている。その際、上級生には、指導的視点を持たせることによって、下級生の技術の引き上げを図っている。さらに、下級生への指導を通して、上級生が自らの持つ技術を再確認させている。これにより、対外的に練習試合を求めずとも、チーム内のスクリメージを通して、下級生の力を伸ばすことができている。

一方、最大の目標である高専大会や、3 月に行われている F1 カップ（高専強化交歓大会）に向けての練習においては、学年に関わらない A チーム（代表候補）、B チームを編成し、練習をしている。

この編成は流動的なものとし、適宜、入れ替えを行うことによって、選手のモティベーションを保っている。

以上の点についてまとめたものを、以下の表 4 に示している。

表 4　練習テーマに即したチームの形態

チーム形態	ねらい
一律（混合）	チーム全員に共通理解させる
上級生＆下級生	学年別に編成　上級生の指導により下級生をレベルアップさせる
A チーム＆B チーム	学年に関わらず編成　A チームは最終メンバーへ、B チームは A チーム入りを目指す

3　バスケットボール部の取り組み

3.1　活動方針の共有

バスケットボール部は、学校教育の一環としてのクラブ活動として存在し、また、バスケットボールを愛する同好かつ任意の集団であると位置づけている。

活動においては、大好きなバスケットボールを行うために、活動にかかる私的時間を共有できるという者の集まりであるという共通の理念を持たせている。

また、部には 3 つの大きな柱があり、シーズン当初のミーティングで、部員に周知させている。

＜3 つのコンセプト＞

1　全国高専大会優勝を最大の目標とする
2　バスケットボールを通じて、地域に貢献する
3　学業とクラブの両立を大切にする

バスケットボール部におけるすべての活動が、全国高専大会優勝を目指したものであり、5 学年すべての部員が共有するものである。

また、バスケットボールに競技者として関わるだけでなく、競技を側面からサポートする機会を設け、バスケットボールを通して得た知識や経験を還元している。

さらに、学生競技者として、バスケットボール偏重にならないように、学業とのバランスを求めている。

3.2　新入部員へのアプローチ

毎年 4 月に新入生が入学し、多くの入部希望者が存在している。入部者の中には、バスケットボール経験年数に差異があるとともに、クラブに対して望んでいる思いが揃っていないのが現状である。

そこで、新入生がクラブを見学し、入部を決めかかる 4 月後半に、毎年新入部員オリエンテーションを実施している。

ここでは、クラブにおける指導方針や活動方針、チーム・コンセプト、年間スケジュール、活動にかかる費用等について説明し、現在の所属部員と活動に対する共通理解を図っている。

また、新入生の多くは、中学時代と生活環境が大きく異なるため、4 月当初は学校生活に対する順化を最優先している。中には、中学校でクラブを引退してから、長い間、バスケットボールをすることに、待ち焦がれていた学生も存在するが、本校学生主事室の方針通り、一律に活動時間を 18：00 までとしている。

3.3　勉学に対する不安を取り除く働きかけ

学生にとって最も大きなストレスといえる試験については、準備期間に差異を設けている。(2 年生以上は試験 7 日前活動休止、新入生は約 10 日前活動休止)

一方、学力に不安を抱える 2 年生以上の学生に対しても、同様の措置を認めている。

また、学業に不安を抱え、休部を申し出る部員に対しては、面談をするとともに、休部期間を明示させている。

3.4　練習開始時における出欠確認

部内では、無断での欠席は認めていない。多くの学生が携帯電話を所有するようになり、電話やメールを通じて、必ず部員やマネージャーに連絡することを共通の約束としている。

練習の始まりには、全員で集合し、学年ごとに欠席報告をさせている。

このことは、チームに対して、各自がしっかりと責任を持つという自覚をもたせるとともに、横（学年間）のつながりを持たせる狙いもある。

3.5　5 年間で最高のプレイヤーに育てる指導方針

多くの方々のご尽力により、現在は高校の各種大会にすべて参加することができている。

ただ、下級生部員にとっては、他の高校には中学時代の同級生が多く存在し、高校生に負けたくないという思いが、非常に強い。

しかし、本校の場合、新チームの結成が 8 月末になり、高校生と比べて 2 カ月近く遅いという現状がある。そのため、目先の結果を求めて、一部の選手を起用するにとどまってしまうことは、選手のモティベーション低下の原因となりうる。

また、過度に、この世代を指導するあまり、3 年生後半のバーンアウトや、4 年生以降の伸びしろをなくすことにつながると考えている。

高校大会に臨むにあたっては、高校生に胸を借り、そこで培った力を、高専大会へつなげるといったスタンスを強調し、指導を行っている。

さらに､5 年間というスパンで部員の成長をとらえ、高校世代終了後も、次の目標を設定することが大切である。

3.6　新チームの結成

全国高専大会は、毎年 8 月に開催されるため、新チームの結成、つまり、シーズンの始まりを 9 月としている。

この場合、シーズン途中の 4 月に新入生加入による戦力の変更が生じるが、チームのゴールが全国高専大会であることを意識させるため、このようにシーズン設定をしている。

また、多くの 5 年生がこの大会で、チームから去ることを踏まえれば、新チームの立ち上げは、ここ数年この時期が望ましい状況である。

3.7　上級生との対話を通したクラブ運営

高専クラブにおける最大のメリットは、16～20 歳という異年齢の集団による交流と、上級生を主とした自治力であるといえる。

平日に顧問が会議等で付き添えない場合は、主将を中心に練習の打ち合わせを事前に行い、運営している。

また、メンバーの決定については、学生から原案を提示させ、顧問と相談の上、最終決定している。

3.8　最大目標は全国高専大会制覇

先に述べた全国高専大会優勝が、チーム・コンセプトであり、最大の目標である。

高専というカテゴリーにおいて、最高の目標を目指す過程こそが、教育方針である人間性の豊かさを育成するために、最もふさわしいと考えられる。

3.9　シーズン・アウォード

シーズンを通して、お互いに高めあい、また、認め合う機会として、シーズン・アウォードを設けている。

これは、表 5 に示す 5 部門について、部員が相互投票を行い、最多得票者を表彰するものである（写真 1）。

なお、部門 1 については、年間の決められた試合の統計によるものであり、自動的に決定される。

写真 1　シーズン・アウォードの様子

表 5　シーズン・アウォードの表彰部門

	表彰部門
1	フリースロー王（年間最高成功率）
2	新人王（1 年時に最も活躍した 2 年生）
3	ディフェンス王（守備でチームに貢献した者）
4	MVP（チームに最も貢献した者）
5	MIP（学生競技者として部員の模範となった者）
6	特別表彰

また、部門 6 については、M.K.（2007 年電子工学科卒）が受賞している。本校入学後にバスケットボールを始め、5 年間で 1 度もユニホームを着ることはなかったが、最後の全国高専大会に向けて、練習に励んだ。下級生からの信望は厚く、今後もこのような学生が現れてほしいという思いで選出した。

3.10　上級生の地域貢献

3 年生後半になると、参加できる大会が減り、大きくモティベーションが低下する傾向がある。

そこで、バスケットボールに選手として関わる立場から、選手以外の関わり方を経験することによって、バスケットボールに対する視野を広げることに取り組んでいる。

その一環として、毎年 2 月に開催される神戸市少年団バスケットボール大会には、大会の審判員として、3 年生以上の部員が参加している。多くの部員にとって、審判員という立場で、バスケットボールに関わることは初めての経験であり、小学生の懸命なプレイから元気をもらうとともに、自身が選手という立場に戻った時に、よりバスケットボールを深めることにつながっている。

また、毎年 10 月に開催される全日本女子車椅子バスケットボール大会には、競技補助役員として、試合運営に関わっている。

3.11　5 年生の送別会

新入部員オリエンテーションが、クラブへの入学式とすれば、送別会は、クラブの卒業式である。

かつては、部員が集まって、食事をする形式で行っていた。平成 19 年度より、5 年間継続した者への敬意をこめて、参加部員を全員正装とし、ホテルの宴会場を借りて、送別会を行っている（写真 2）。

写真 2　送別会で謝辞を述べる 5 年生

4　クラブ運営上の問題点と課題

4-1　退部した学生数と退部理由

多くの学生が志高く、4 月に入部してくるが、様々な理由によって、退部している。退部を希望するすべての部員は、顧問、上級生、同級生により留意されるが、最終的には本人の意思を尊重している。

平成 16 年度から 5 年間で、入部から 3 年以内に退部した人数を表 6 に示している。

表 6　年度別・男女別退部者数

	男子部		女子部	
	入部	退部	入部	退部
平成 16 年度入学生	8	4	10	4
平成 17 年度入学生	7	3	5	1
平成 18 年度入学生	12	3	5	1
平成 19 年度入学生	13	4	5	2
平成 20 年度入学生	12	1	2	2
合計	52	15	27	10
退部率		28.8%		37.0%

入部から 3 年以内（3 年次修了を含む）に退部する学生は、年度によってのばらつきがあるものの、男子

部で約 4 人に 1 人、女子部で 3 人に 1 人という割合である。

また、退部理由の内訳を以下の表 7 に示している。

表 7　退部理由の内訳

退部理由	男子部	女子部
学業不振により勉学を優先	5	1
アルバイトを優先	2	1
掛持ちクラブを優先（学生会）	0	3
進路変更（3 年次修了を含む）	2	1
趣味を優先	1	2
家庭環境の変化	2	1
モティベーションの低下	2	0
その他	1	1
合計	15	10

入部の際には、経験の有無や家庭環境、通学時間等を考慮していないが、学校生活を送るなかで、様々な問題が生じていることが伺える。

特に、3 年生以下では、高校大会も多く、クラブと学業の両立が難しくなっていることが伺える。

4.2　引率及び練習の付き添いの問題

高校大会の時期になると、男子部及び女子部の高校チームと、本校で行う男子部・女子部の上級生の練習があり､4 つのチームに分かれて活動せざるを得ない。

そのため、学外への引率や練習付き添い等、複数の顧問への依頼が必要となる。

幸いに、バスケットボール部には、5 名の顧問がおり、快く、試合引率並びに練習の付き添いを引き受けて頂いている。

表 8 は平成 20 年 7 月 26 日（土）における顧問動静の一例である。

表 8　顧問動静の一例（平成 20 年 7 月 26 日分）

顧問	部類	練習及び試合
1	男子部下級生	選抜地区予選（於；北須磨高校）
2	男子部上級生	本校で練習（13：00～17：00）
3	女子部下級生	選抜地区予選（於；北須磨高校）
4	女子部上級生	本校で練習（9：00～13：00）

5　考察

5.1　高専教育におけるメリット

高専教育のクラブ指導においては、5 年間という時間が最大のメリットである。それは、「一貫性」と「継続性」という人間教育に欠かせないエッセンスを十分に活用できるからである。

16～20 歳の異年齢集団が、共通の目標を有して、年間を通じて活動していく中で、社会で必要とされる様々な人間力の醸成を最大に引き出せる活動であると考えられる。

5.2　ロールモデルとしての上級生

5 年間の活動のなかで､高校大会を終えた上級生が、常にモティベーションを高く保ち、また、学校生活において、それぞれのゴールに向かって邁進していく姿が､下級生にとって何よりのロールモデルとなりうる。

確かに、就職試験や進学準備等で、不十分な活動しかできない期間も存在するが、クラブとの両立を念頭に置き､時間をやりくりしながら参加する姿勢こそが、本来の学生競技者の在り方であり、また、本校教育理念である､「心身の調和のとれた、たくましい感受性豊かな人間形成」をサポートすると考える。

また、それらを実現した上級生に、普段から間近で接している下級生が､「自分たちもできるんだ」という自信を持つことも、クラブにおいては非常に有効な手段であり、クラブを活性化させると考えられる。

5.3　下級生へのコミュニケーション

3 年生以下における退部の留意については、本人へのコミュニケーションを始め、学級担任や教科担当とのコミュニケーションが不可欠であると考えられる。

学年末における進級認定だけでなく、日頃のトラブルや家庭環境の変化など、可能な限り早くから、情報を入手し、対処しておく必要性を感じている。

また、日頃から、同級生同士のコミュニケーションの存在や、グループ作りなどを、把握することも大切であると考えられる。

5.4　5 年間計画の確立

これらの実現を可能にするために、指導する側が､5 年という時間軸を持ち、特徴的に発生するモティベーション低下の時期を予見し、回避していく術を持つことが大切である。

言い換えれば、この時期に最も大切にすべきことは何かという明確な指導方針を持たなければならない。また、クラブ活動を含め、それ以外の日々の生活場面で、この指導方針を具現化する学生とのコミュニケーションが肝要であるといえる。

参考文献

(1)　平成 21 年度　神戸市立工業高等専門学校　学生便覧

(2)　平成 19 年度　徳山工業高等専門学校　「専攻科修了生・本科卒業生・企業対象アンケート」